

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫

◆◆◆ No.0460 ◆◆◆

17/11/29

【 12月相場は「ドル高やや有利」、ただ年足は2年続けての陰線か 】

11月は残り2日、今年もついに1ヵ月となった。そうしたなか、今回の当レターでは恒例となった過去の経験則に基づいた月間相場見通しをレポートしてみたい。調べてみると、過去の12月相場は取り敢えずドル高・円安に振れるケースが少なくないようだ。とは言え、いわゆる勝率は6割程度で、大きく偏っているわけではない。

なお、仮に12月がドル高に振れたとしても、今年ドル/円の寄り付きが116円後半であることから、「年足」は2年続けての陰線引けとなる可能性が指摘されている。

◎値幅そのものは大きくない傾向、「金融」とくに「為替」に関するニュースにも要注意!?

今月初め1日付のレポートで、筆者は経験則をもとにした11月相場見通しについて、「ドル安よりもドル高方向へと動き易い」「月間の変動幅そのものが比較的大きい」——と2つの特徴を指摘したが、結果からすると、前者はもちろん後者についても的中させたとは言にくい。ただ、月内に本日を含めてまだ2営業日を残し、その変動幅は4円近くに及ぶ。前月である10月が月間を通して、わずか2.76円の変動に留まったことからすれば活発な動意で、だいぶ盛り返してきたとは言ってもよい気もしている。

さて、そんな経験則の観点から、今年最後12月相場について考えてみたい。

まずは、先にも記述した戦績について、1990年以降昨年まで過去27年間を振り返ってみると、勝率は16勝11敗だった。つまり、6割程度の確率でドル高・円安に振れていることになるが、それほど極端に偏っているわけではなく、「ドル高有利」と声高に指摘できるほどではないようだ。

一方、12月相場について「ドル高に振れやすい」以外で、別に「特徴」がないか調べてみたところ、あと2つほど興味深い事象がわかった。

順を追って説明すると、ひとつは「値動きそのものはさほど大きくない」ということで、年間を通してあまり動かず値幅の乏しい月になることが少なくない。たとえば、2013年12月は月間変動3.79円で、年間変動幅10位の小変動に終わっているほか、2011年は月間を通したレンジがわずか1.34円、これは月間の過去最小クラスの変動だった。また、昨2016年はというと、変動幅5.54円でなかなかのものだったが、前月の変動が13.36円となったほか、年間に月間で10円以上動いた月が3回も観測されていたことなどと比較すれば、「やや落ち着いた値動き」——だったと言えそうだ。

また、12月相場のもうひとつの特徴としては、「一方向に偏った値動きを辿り易い」ということも意外に多い。これはセオリーに沿ったドル高ではなく、セオリーとは逆にドル安方向へと動いても、おおむねそうした傾向がうかがえる。実際、2015年は経験則的に有利なドル高とは逆のドル安へと動いたのだが、その値動きは「月初高の月末安」、1ヵ月を通じて緩やかな右肩下がりをもたらしたことが観測されていた。

これは、ヘッジファンド投機筋や資本筋などが、月の初めはともかく、後半にかけては新年を意識した投資スタンスへと傾斜するだけに、1月以降の相場変動が年内に「先食い」されるためであるのかもしれない。

なお、過去のニュースを調べた場合、12月は金融それも「為替」に直結して重要な事件が起こることが多いようだ。幾つか例を挙げると、「日本が金本位制を停止(1931年)」「スミソニアン合意(1971年)」「豪ドルが変動相場制へ移行(1983年)」「韓国が完全変動相場制へ移行(1997年)」——などとなる。

また、火山の噴火や地震といった自然災害、年末らしく(?)来年へと越年できない企業も多く聞かれ、有力とされる企業倒産も過去には数多く観測されていた。毎年確実に起こるということではないが、今年に関しても、それら事象についてしっかりと注意を払いたい。(了)

当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

